

特集 油絵をさぐる——松下春雄《花を持つ女》と鬼頭鍋三郎《手をかざす女》

連載「美術館そして私——80年代からミレニアムへ」山本富章 新収蔵作家紹介「加藤大博」

EVENT「アートとめぐるはるの旅展 ワークショップ 隠れ家をつくらう」 展覧会現在進行形「フランソワ・ポンポン展」

REVIEW「本山ゆかり コインはふたつあるから鳴る」「大・タイガー立石展」

COLUMN「今を生きているからこそ、古典。」



鬼頭鍋三郎《手をかざす女》1934年 名古屋市美術館蔵

名古屋市美術館ニュース アートペーパー

発行 名古屋市美術館
名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の杜・白川公園内)
TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005
<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>
休館日 毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始
開館時間 午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

執筆 井口智子(I.)、勝田琴絵(KK)、久保田舞美(mm)、
竹葉丈(J.T.)、角田美奈子(み。)、保崎裕徳(nori)、
星子桃子(☆)、森本陽香(haru)

デザイン 岡田和奈佳
印刷 鬼頭印刷株式会社
発行日 2021年8月1日



Nagoya City Art Museum

特集 油絵をさぐる ――松下春雄《花を持つ女》と鬼頭鍋三郎《手をかざす女》

名古屋市美術館では、2016年1月に北川民次の油絵の技法をさぐる展覧会を開催しました^{*1}。この展覧会は、愛知県立芸術大学と共同で行われた北川民次の作品調査をもとにした企画でした。この調査は、当館所蔵外の作品も含め、デジタルカメラによる高精度撮影、紫外線、赤外線による写真撮影法などを用いて絵画の状態を調べたり、再現作品を制作する研究を行うことで北川民次の絵画技法を明らかにしようとするものでした^{*2}。

共同調査再び

今年再び、愛知県立芸術大学と共同で当館所蔵の油絵の調査を行っています。愛知県立芸術大学には2014年に文化財保存修復研究所が創設され、大学の研究施設としての役割とともに、この地域の文化財の調査・修復に取り組んでいます。このたびは、保存修復研究所と連携して調査しています^{*3}。取り上げる作家は松下春雄（1903-1933）と鬼頭鍋三郎（1899-1982）です。2人は、1923年に名古屋で旗揚げされた絵画グループ「サンサシオン」の創設メンバーで、松下は当時20歳、鬼頭鍋三郎は24歳、ほかには中野安次郎（1901-1992）、加藤喜一郎（1901-1987）が参加しました。「サンサシオン」はフランス語で「感覚」を意味します。この名前は、松下の友人の詩人、春山行夫が名付けました。「サンサシオン」は、創設時から注目され、洋画研究所の運営、公募展の開催、そして帝展入選の作家を生み出しました。

今回の共同研究では、当館が所蔵する松下春雄と鬼頭鍋三郎の作品のうち、松下の《花を持つ女》（図1）、鬼頭の《手をかざす女》（表紙）を中心に2人の初期の女性像の調査を進めています。

どうしてこの2作品を取り上げたのか

当時、画壇への登竜門であったのが、国が主催する帝国美術院展覧会でした。1907年に文部省美術展覧会（略称：文展）として始まり、1919年に帝国美術院展覧会（略称：帝展）となりました。当初は日本画、西洋画、彫刻の

3分野で始まり、1927年の第8回展には美術工芸が加わりました。松下や鬼頭がプロの画家を目指した時代は、帝展に入選することが画家として認められていく道であり、また帝展の結果は新聞で報道され、広く世間に知られる重要な機会でした。

松下春雄が初めて帝展に入選したのは1924年に開催された第5回展で、水彩画の作品でした。この第5回から第8回まで水彩画で連続して入選し、第9回（1928年）からは油絵で入選を続け、1931年開催の第12回展で入選した《花を持つ女》が特選に選ばれています。同じ年に、名古屋出身の佐分眞が特選を受けており、2人は愛知に初めての特選をもたらしました。一方、鬼頭鍋三郎も1924年に初入選しています。鬼頭は当初から油絵を出品しており、入選を繰り返し、1934年に《手をかざす女》が特選に選ばれています。

作品調査を行なった《花を持つ女》、《手をかざす女》は、松下、鬼頭にとって帝展で入選・特選という評価を受けた作品であり、特に特選受賞は当時、地元新聞でも取り上げられ、2人の画歴の上で重要であるのみならず、愛知の洋画壇にとっても記念碑的作品といえます。

松下春雄と鬼頭鍋三郎

松下春雄は1903年に名古屋で生まれ、小学校卒業後に明治銀行で給仕として働き、1918年に人見彌^{*4}の洋画研究所で学びます。1921年に画家を目指して上京し、働きながら本郷洋画研究所で岡田三郎助^{*5}の指導を受けます。1923年9月に名古屋へ戻り、同月27日に鬼頭ら3人と「サンサシオン」を結成しました。〔→Topics:サンサシオンはなぜ1923年に結成されることになったのか〕翌年には、サンサシオン自由洋画研究所を開所。松下自身は再び上京。その年から帝展に連続入選を果たしますが、1933年12月31日に白血病のため急逝しました。翌年の帝展では、絶筆《母子》が入選し、特選に選ばれます。

鬼頭鍋三郎は、1899年に名古屋で生まれ、名古屋商業学校を卒業後に明治銀行に就職します。そして、1923年に、松下らとともに「サンサシオン」を結成しました。同年には岡田三郎助に師事し、翌年には帝展に初入選します。その後も帝展入選を重ね、松下が亡くなった翌年の帝展で、松下の《母子》とともに《手をかざす女》が特選に選ばれています。鬼頭は、戦中、戦後も画家として活躍し、日本芸術院会員、光風会理事長を務め、さらに愛知県立芸術大学で教鞭をとり後進の指導にもあたりました。1982年に亡くなっています。

鬼頭の東京のアトリエは、松下のアトリエ（自宅）の隣りにあり、2人はともに制作に打ち込みます。1933年末、名古屋にいた鬼頭は「マツシタクトク」の電報を受け、中野安次郎とともに急ぎ夜行列車に乗り東京に向かいました。しかし病院に着いたときには松下はすでに意識はありませんでした。鬼頭は、松下の死に際して「大いに彼〔松下〕によってネジをかけられた訳だが、彼自身余りにネジを巻き過ぎて、ゼンマイをこわしてしまった」と綴っています^{*6}。友でもあり、同志であった松下の急逝は鬼頭にとってはどれだけ大きなショックだったかは察するに余りあります。また、将来の活躍を囑望された若き画家の急逝は新聞でも報じられました。

調査して何を知ることか

調査の話に進む前に、まずは油絵がどのように描かれているのかを考えてみたいと思います。油絵の断片を見たとすると、大まかに言うと最下層に布や板など「支持体」があります。その上に絵具が塗られています。絵具は塗り重ねられており、層状（重層構造）になっています。そして「支持体」と「絵具層」の間には、「支持体」が絵具層をしっかり支えることができるようにするために施された「下地層」があります。私たちが目に見ている油絵は、この重なり合いによって生まれたものです。絵具のなかには、下の色を通すものもあれば、下の色を覆ってしまうものもあり、そのつくりはかなり複雑なものです。

このたびの調査では、その複雑で私たちの肉眼では見えない「つくり」をデジ



図1 | 松下春雄《花を持つ女》1931年 名古屋市美術館蔵

タルカメラによる高精度撮影、紫外線、赤外線による写真撮影などの助けを借りて調べてみようというものです(図2)。それによって、「つくり」だけでなく描き直しや作家の工夫、後世による加筆、修復された部分を知ることができます。さらに、2人の制作の共通点や相異点が見えてくることが期待されます。また、どこがどの程度傷んでいるのかもわかり、どのように修復したらよいかを考える重要な情報を与えてくれます。ちょうど、私たちが健康検診でレントゲン撮影をして、体のなかの状態を知ると同じように、こうした方法で調べることは「作品の健康診断」となります。調査して情報を集積することは「作品の履歴」をひもとくことになり、そして、これからより良き状態で作品を残していくための重要な情報となります。



図2 | 松下春雄《花を持つ女》調査風景

何が分かる可能性があるのか

調査方法は、私たちの目では見えない光を使って作品の表面を撮影したり、高い倍率で表面を映し出したり、微弱なX線をあてることで発生する固有の蛍光X線を測定して、絵具に含まれている元素を知り、それによって使われている絵具を推定したりと、複数の方法を用います⁷⁾。

ここでは、松下春雄《花を持つ女》の調査でわかってきたことを紹介します。

消された花一輪

この作品は、森の中、切り株に腰掛け花束を持つ女性が描かれています。作品を、赤外線を使って撮影した写真(図3)で見ると、花束から外れた位置に、意図的に描かれたと考えられる×印が確認できました。どうも、当初はここにも花が描かれていたようです。この作品に

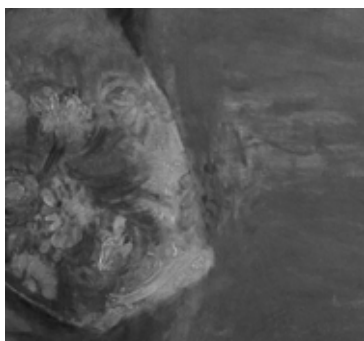


図3 | 松下春雄《花を持つ女》赤外線写真(部分)

はデッサンが残されており、そのデッサンでは花束は女性の両膝の上のあたりに描かれています。結局、作品では、女性の右手に花束を持たせ、左手を隠すように花が描かれました。松下がどこに花束を置こうかと苦心していたことが想像できます。そして、松下はこの作品を描くにあたり、女性のポーズ、背景の木々の位置など、構図をしっかりとつくり上げて描いていたことが、構造線を使って調べてみるとわかります。一度描かれた一輪の花は彼の構想には結局合わず、「これは止め」と×印をして塗りつぶしてしまったと推定されます。赤外線による写真では、ほかにも、頭部の描き直しが確認でき、当初は現在よりわずかに左右が広がっていたことがわかりました。さらに、画面右下部に、修復されたあとがあることも示しています。

《花を持つ女》の暗い印象をさぐる

油絵は表面にワニスを施しますが、このワニスは時間とともに黄変し、そのため作品の印象を変えてしまうことが知られています。修復作業で黄変したワニスを除去し、あらためて塗布することで、完成当初の絵の見え方に近い印象を取り戻すことができます。しかし、描かれた当初の姿はどうであったかを、ワニスを除去する前に調べることが大切です。

《花を持つ女》は、画面全体が暗い印象を与えています。帝展に出品当時の批評からも「暗い光線が効果的に扱われている。堅固で自然で緻密な筆致、バックの軟らかさも巧い。……磨かれた銅盤の表を撫でるような感じと朗らかな雰囲気を感じさす」⁸⁾、あるいは「全畫面を暗いヤニ色で単化し、重々しくぬりつぶしている」⁹⁾とあり、当初から脂色、銅の表面という印象を与えていたことがわかります。このたびの調査で、こうした印象をつくりだした要因が少しずつわかってきました。花束の白い包みの部分において、白色がきれいに見える箇所と白色絵具の上に一層塗布されて白色が暗く沈んで見える箇所を蛍光X線装置で調べたところ、白色が暗く沈んで見える箇所の鉄(Fe)の検出量が白色に見えているところよりもやや多いことがわかりました。ほかの調査と照らし合わせて、意図的にわずかな量の茶褐色の土性系顔料を溶き油に混ぜて薄く塗布した可能性があり、おそらく作品全体にも、わずかな量の茶褐色の土性系顔料を溶き油に混ぜて薄く塗布した可能性が推測されました。

松下は、1931年の《花を持つ女》に続き、1932年には《機織》、1933年には《女と野菜》が帝展に入選しました。1934年には遺作《母子》が出品され、入選し特選に選ばれました。取材を受けた淑子未亡人は「松下は最近自分の絵が暗い傾向を持つことに対して何か考え続けていました。よく『こんどの絵は外科的手術だ』と申していました……(略)」¹⁰⁾と話しており、松下が自分の絵の「暗さ」について考え、試行錯誤していたことが伝わってきます。

「さぐる」展示

ここでは松下春雄の《花を持つ女》について、このたびの調査結果の一部を紹介しました。調査は作品のどの部分を調査するのか、データをどのように読むのかがカギとなり、そこから得られた情報を文献で確認したり、記録と照らしたり、同時代作品を調べたりしながら作品の履歴をたどっていきます。今年の9月18日(土)ー11月14日(日)、この調査結果をもとにした常設企画展「鬼頭鍋三郎と松下春雄の女性像をさぐる」を予定しています。また、調査結果は、愛知県立芸術大学から発行される「紀要」や修復研究所の「年報」でも報告する予定です。

本記事執筆にあたっては、共同研究者である愛知県立芸術大学の白河宗利さん(准教授)、成田朱美さん(同大学文化財保存修復研究所研究員)に協力いただきました。御礼申し上げます。(I.)

TOPICS

サンサシオンはなぜ1923年に結成されることになったのか

グループの結成は、中心人物のひとり松下春雄が名古屋に帰郷したことがきっかけでした。当時、画家を目指して上京していた松下春雄は、1923年9月1日、関東南部を襲った大地震によって、名古屋へ戻ることを余儀なくされました。創設メンバーのひとり中野安次郎によると、松下は「関東大震災後まだ世情が安定していなかった時期なので展示会の旗揚げをするなど不謹慎だとする声が外部にありましたが、こんなときこそ世の中を明るくするためにも展示会をするのだ」と先頭に立って実現させたとのこと。困難なときにこそ、美術の力を信じた松下をはじめ、20代前半の4人の若者の活動は、名古屋の洋画界で注目を集めることになりました。



松下春雄《サンサシオンの旗》1923年

ニューヨークへ

山本富章 美術家

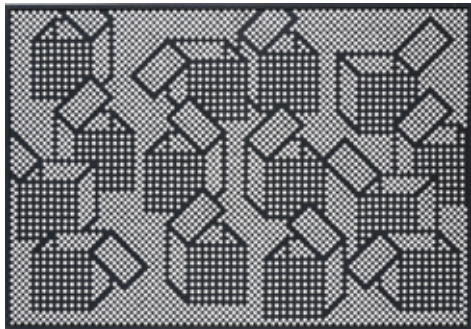
1986年の早い時期、アメリカの美術関係者の一団が日本の現代美術の調査に国際交流基金の招きで来日したが、そのうちの何人かが改めて更なる調査に訪れた。その際に「作品のプレゼンテーションに京都まで来られないか」と連絡があった。当時の美術雑誌で名前を目にしている作家も集まり、それぞれスライドで自作の紹介をした。この調査を踏まえて「Against Nature」展が企画され3年後に全米を巡回することになる。

調査メンバーの一人であったNYU（ニューヨーク大学）付属美術館グレイ・アート・ギャラリーの館長トーマス・ソコロフスキー氏は私の作品が印象に残っていたようで、後日87・88年にNYUでの文化庁在外研修を申請したい旨を伝えると、「NYでの研究は有意義なものになる」という丁寧な推薦状とともにグレイ・アート・ギャラリーのリーフレットも送ってくれた。

当時、在外研修の申請はかなり難しいといわれていたのだが、幸運にも初トライで選考され1年間の研修が認められた。海外の経験といっても、110号に書いた3週間ほどのヨーロッパ旅行しかない自分に、NYで何ができるのだろうかと不安と期待を持ちながら、直前の『絵画1977-1987』の展示を終えて10月半ば旅立った。到着

翌日、NYUに出かけソコロフスキー氏に挨拶に行くと客員研究員カードにサインを入れ、これで公立の美術館はフリーパスで行けるからと渡してくれた。

リノベーションが終われば入居可能といわれたスペースは、市の検査が遅れ11月末になったため、ホテル暮らしのまま美術館に通い続けていた。ソコロフスキーが渡してくれたカードは、メトロポリタン美術館の中にあるトップライトから光が降り注ぐレストランにランチに行く際にも入場料がいらないから便利なものだった。MOMAよりはるかに大きな空間で、カウンターにはシェフたちが作る出来立ての料理が並び、安くて美味くて何度も出かけた。エジプトやアフリカ関連のコレクションの膨大な量に驚いたが、古代から現代まで館内の展示物を隅々まで見て回った。滞在中に出かけた回数はゆうに80回を超えていたと思う。当時のチケットは小さな金属バッジで、それを襟などに挟み付けて会場を回るのだが、日替わりのMETのロゴが入ったもので何個も持ち帰りお土産にした。不要になったバッジは入口脇の透明なケースに入れるのだが、色違いのバッジが積み重なったケースは、まさに、アルマンのアキュムレーション（集積）ではないかと思ったりしていた。



加藤大博《点による作業—80.D2》1980年 名古屋市美術館蔵

新収蔵作家紹介

加藤大博 Kato Daihaku

令和元(2019)年度に新たに作品を収蔵した加藤大博(かとうだいほく・1936-)を取り上げます。

名古屋市に生まれ育った加藤は、名古屋市立菊里高等学校で美術部に所属し、美術科教諭で顧問の江上明(えがみあきら・1919-1987)の導きで愛知学芸大学(現在の愛知教育大学)に進学し、美術を学びました。江上は、美術評論家としても活動し、この地域の作家たちを歴史に残す仕事も行っています。加藤も江上に倣い、自身の創作発表活動と並行して、この地域の作家の創作発表活動を支援し、それらを評価記録する活動を行ってきました。昭和12(1937)年開催の名古屋汎太平洋平和博覧会を先取りし、略称の「大博覧会」から取られた「大博」は、「もとひろ」と読むのですが、音読みの「ダイハク」が広まり、作家もそれを作家名とするようになっていきます。

名古屋市美術館では、今年度の常設展「名品コレクションI」(会期:7月10日(土)―11月14日(日))において、「郷土の美術」のコーナーで加藤の作品を「加藤大博と現代美術の5人」と題して紹介します。会期中に実施予定の「コレクション解析学」でも

取り上げる《点による作業—80.D2》(1980年)などの数点を紹介しますが、いずれも今回ははじめての展示となります。

「現代美術の5人」は、1993年に加藤が企画した展覧会の名称です。伊藤利彦(いとうとしひこ・1928-2006)、稲葉桂(いなばけい・1937-2016)、近藤文雄(こんどうふみお・1938-2017)、星野眞吾(ほしのしんご・1923-1997)、吉川家永(よしかわいえなが・1916-2009)の5人を取り上げていますが、星野を除く4人はこの展覧会が契機となって名古屋市美術館が作品収集を行っています。

同時期に加藤の作品収集を行った愛知県美術館でも今年度の第1期コレクション展(会期:4月23日(金)―6月27日(日))で新収蔵の加藤大博作品が展示紹介されました。両館ともにそれぞれの他の所蔵作品との関係から時代や傾向の異なる作品を選択しています。互いを比べ、補いながら、より良く作家と作品に親しんでいただければと思います。(み。)

コレクション解析学については、詳しくは美術館ホームページ等をご覧ください。

註 |

- *1 「北川民次の絵画技法―自然科学的調査と再現研究を通して―」, 期間:2016年1月5日~2月21日、場所:当館常設展示室3
- *2 白河宗利、歌田眞介、森田恒之「北川民次の絵画技法(1)~(7)」, 愛知県立芸術大学紀要、Nos.40-46、2011-2017年(共同執筆者:木島隆康、森田義之、増田直人、山田諭、田中元偉、鈴鴨富士子、杉原朱美、西川竜司、池田高仁、宮田真有、大久保早希子)
- *3 愛知県立芸術大学・名古屋市美術館共同研究、研究主題「鬼頭鍋三郎、松下春雄の絵画技法―1930年代前後制作作品の自然科学的調査」2021年度実施
- *4 人見彌:ひとみ・わたる。1887年名古屋市生。東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科卒業後、1917年頃に名古屋に戻り、人見洋画研究所を開所した。松下春雄、遠山清、藤井外喜雄、市野長之介らが学んだ。
- *5 岡田三郎助:おかだ・さぶろうすけ。1869年佐賀県生。黒田清輝、久米桂一郎に師事。東京美術学校教授。1912年、藤島武二とともに本郷絵画研究所を創設。
- *6 鬼頭鍋三郎「死の前後 畫人松下春雄のこども 上」名古屋毎日新聞、昭和9年1月11日
- *7 今回用いた調査方法は、通常光写真撮影、側光線写真撮影、紫外線蛍光写真撮影、赤外線写真撮影、デジタルマイクロスコブによる観察、携帯型蛍光X線装置による分析。
- *8 林達郎「美之國」昭和6年11月号【『日展史10 帝展編5』社団法人日展、1983年、518頁】
- *9 夢平「サンサンオン展を見る(二)」名古屋新聞、昭和7年5月25日／名古屋画廊「松下春雄作品集」、1989年、巻末年譜1932年 サンサンオン第9回展(5月22日-29日)の項目
- *10 「死の一瞬まで燃えてゐた藝術心」報知新聞、昭和9年10月16日

引用文については、旧字体・旧仮名遣いを新字体・新仮名遣いに改めた箇所があります。

主要参考文献 |

「松下春雄作品集」、名古屋画廊、1989年
「鬼頭鍋三郎展 図録」、朝日新聞社、1991年
日展史編集委員会「日展史」8-11、社団法人日展、1982-83年
「サンサンオン1923~33―名古屋画廊の青春時代―」
名古屋画廊、2004年

EVENT

「アートとめぐるはるの旅」展ワークショップ 隠れ家をつくろう

2021年3月28日(日)10時～15時
名古屋市美術館 通用口前駐車場

「旅」をテーマにコレクションから選りすぐりの作品を紹介した展覧会「アートとめぐるはるの旅」(2021年3月25日(木)～6月6日(日))では、関連事業として木工制作のワークショップを開催しました。アートを通じた旅はワクワク、ドキドキの連続。その途中で、旅の疲れをいやし、ほっと一息つけるような場所を作ろう！ということで、講師の林幸秀さん(造形作家)の指導のもと、7組の家族が1基ずつ隠れ家を制作しました。うらかな春の日に、気持ちの良い屋外で楽しく作業♪……と思っていたら、当日は春の嵐で大雨に。事業中止も脳裏をよぎりましたが、テントを張って雨をしのいで実施し、いずれも力作が完成しました。

使用した材料は、木の枝やしゅろ縄などの自然素材です。複数の枝を縄で縛って骨組みを作り、部分的にネジ留めして補強。最後に、麻布などを巻いて心地よい空間に仕上げました。縄で縛るという原始的な方法で自立した立体を作るのは簡単ではありませんが、そんな心配をよそに、いずれも2名は入れるような大型の隠れ家が仕上がりました。スタッフ一同、参加者の方々のものづくりに対する情熱に圧倒されました。

家族で協力して作る楽しさや、身近な素材で造形する技術を体験し、思い出深いワークショップになったようです。7基の隠れ家は、展覧会会期中、美術館地下1階のサンクンガーデンに展示され、来館者の目を楽しませてくれました。美術館は、ものを「見る」よろこびと同時に、「つくる」楽しさも体験できる場所でありたいと思います。今後も、有意義な体験ができる事業を企画していきますので、名古屋市美術館のイベントをぜひチェックしてくださいね。(haru)



ワークショップの様子

参加者の感想

家族一緒にひとつのもの、しかも子どもがワクワクする隠れ家を作るのはなかなか体験できないので、楽しかった。

しゅろ縄で縛る作業が一番面白かった。何でも縛れる気がしてきたから、もっと縛りたい。身につけた技を使って何かを作りたい。

家族一緒に協力して作業できたことがとても良かった。木を支える人、縄で縛る人、それぞれが協力しないと、一人ではできないし、子どもが大人と役割をチェンジして作業できたのも良かった。

力仕事をして力がついた。そしたら(子どもが)逆上(あがり)ができるようになったそうです。私(保護者)も自分でこんな大きなものが作れるんだと自信ができました。

作成途中で、思いつきで新しい部屋を増設したり、どんな隠れ家にするか考えるのが面白かった。ワークショップのあと、子どもが家の形に注目するようになったような気がする。

参加者：7組21名
(感染対策のため、家族ごとの参加)

展覧会現在進行形

フランソワ・ポンポン展

2021年9月18日(土)～11月14日(日)
名古屋市美術館



フランソワ・ポンポン《シロクマ》1923-1933年 群馬県立館林美術館蔵

フランソワ・ポンポンの名前をすでにご存知の方は、オルセー美術館にある大きな《シロクマ》の彫刻を見た経験があるのではないのでしょうか。フランス美術や彫刻に詳しい人を除いて、まだ十分に世間に知られているとはいえない、この動物芸術家^{アニマルエ}の日本初となる回顧展の準備が進んでいます。

ポンポン(1855-1933)が活躍したのは今からおよそ100年前です。古代ギリシャやルネサンスの彫刻を思い起こせばわかるように、ヨーロッパの美術史においては神々や人間の姿を形作った彫刻が圧倒的に優位であり、動物彫刻が注目を集めることはまれでした。それが19世紀になると動物の造形を得意とする彫刻家の活躍が目立つようになり、20世紀の前半には様々な様式の動物彫刻が数多く制作されて普及していききました。その要因として考えられるのは、彫刻の購買層の変化です。王や貴族、教会といった権力者だけでなく、19世紀に勢力を増していった中産階級が彫刻の市場を支えるようになると、その趣味と居室により適したもの、つまり親しみやすい主題や当世風で洒落た外観、そして卓上サイズの小品のニーズが高まっていきました。

また、18世紀末にパリで誕生した動物園は、19世紀から20世紀前半にかけて、ヨーロッパから世界各地へと広がっています。1907年には動物商カール・ハーゲンベックが、無柵放養式で知られる画期的な動物園をハンブルクに開園しました。その背景には、急拡大しつつあった動物取引のための用地を確保するという理由もあったと指摘されています(溝井裕一『動物園・その歴史と冒険』、2021年)。動物園の発展と拡大は、世界中の珍しい動物や獰猛な動物を支配下に置き、国力を誇示しようとする列強諸国の政治的思惑と不可分ですが、その結果、この時代の動物に対する市民の関心は、それまでより格段に高まっていたといえるでしょう。

ポンポンはハトやイヌなどの身近な生き物から、アヒルやニワトリなど田舎で飼育される家畜、シロクマ、ヒョウ、カバといった動物園で見られる珍しい猛獣まで、様々な動物を形作っています。そして観察をもとに動物の体つきや動きの核心をつかみ、簡潔で流れるような形状をもつ独自の彫刻を発展させていきました。時代を象徴する動物彫刻家の作品の数々、どうぞ楽しみにお待ちください。(nori)

REVIEW

本山ゆかり コインはふたつあるから鳴る

2021年4月23日(金)ー5月11日(火)

[緊急事態宣言発令により会期変更]

文化フォーラム春日井・ギャラリー



本山ゆかり《Ghost in the Cloth(二本の薔薇)》2021年 撮影 | 澤田華
©Yukari Motoyama Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery

本山さんは春日井市出身、現在は京都を拠点に活動している若手現代美術家です。ロープ・アクリル板・布といった、従来の絵画の枠組みからは離れた形態を持つ作品を作り続けています。地元で初となった本個展では、2014年から今までに取り組んできた《Window》《画用紙》《Ghost in the Cloth》の3シリーズが一挙に展示されました。今回が初見の作家でしたが、洗練された造形的美しさに、また慎重に選び取られた支持体・描画・モチーフの諸要素が共鳴して思考の結晶となり、鑑賞者に「絵画とは何か」を考えることを促す強い喚起力に、3シリーズに通底する魅力を感じました。

私が最も惹かれたのは、複数の色の布を繋ぎ合わせ、裏側に綿を当てて花やナイフのモチーフを縫い付けた《Ghost in the Cloth》シリーズです。ミシン糸の緻密な線は色と色の間を滑らかに横断し、どこか上品さを漂わせます。同時にこの透明な描線は、支持体である布に沈み込み、代わりに布が生み出す起伏や質感が全面に押し出されます。既存の絵画が規定する

線図と支持体の主従とも言える関係のない交ぜにした、非常に実験的な試みと言えるでしょう。またモチーフについて本山さんは、歴史的に意味を背負われすぎているものを意図的に選んでいると話します。深く布に刻印されたイメージは、支持体の物質性と密着することで意味という重い荷が降ろされ、独特の浮遊感が与えられていました。その漂流につられてか、私は、イメージを「掴む」ために直接布に触れたいという衝動に駆られ、絵画に描かれたイメージに対する明確な形象や意味付けを、いかに自分が今まで求めていたかを気づかされることとなりました。

本山さんの作品は、これまでの絵画の定義を疑う、非常にクリティカルな視点に端を発しているにもかかわらず、鑑賞者への投げかけは挑発的というよりも、語りかけるような優しさを持っていると感じました。その絶妙なバランスが、凜とした空気を保った心地良い知的空間を生み出していたように思います。(mm)

大・タイガー立石展

2021年4月10日(土)ー7月4日(日) 千葉市美術館

[青森県立美術館、高松市美術館、埼玉県立近代美術館／うらわ美術館へ巡回予定]

タイガー立石(立石紘一／立石大河亞、1941-1998)は、様々なジャンルで活躍した作家である。初期には中村宏(当館で2007年に個展を開催)と「観光芸術研究所」を設立するなど前衛的な活動で注目されたが、のちにその仕事は絵画だけでなく、漫画、絵本、イラストなどへ広がっていく。今回の回顧展では、多彩な作品とアイディアスケッチなどの資料が紹介され、彼の幅広い活動とそこに通底する思考を辿ることができた。

その制作の特徴は、同じモチーフを執拗に繰り返すことにある。「虎」「富士」「螺旋」などの決まったイメージが、様々なメディアで何度も登場するのだ。なかでももっとも頻繁に描かれるのが「虎」である。それらは丸まったり転がったりするうちにぐるぐると形態を変えていき、やがてスイカのような全く別の物体になってしまう。その変容はいわば「異時同図」のように一つの画面のなかに描かれていて、シュレリアリズムやイタリア未来派からの影響も感じさせる。

立石の作品は「ポップ」とも称される。誰もが知っているイメージや当時話題となった人物を、画面のなかに度々登場させているからだ。虎がコカ・コーラを持っていたり、《ゲルニカ》の登場人物が毛沢東にすり替わっていたり、立石の作品のなかでは、異質なイメージ

が等価に組み合わせられることも珍しくない。また、漫画のようなコマ割りもしばしば絵画に取り込まれており、SFのような不思議な物語が生み出されている。

モチーフを自由自在に変容させ、意外性のあるストーリーを作り上げていく。こういった手法によって、立石の作品は物事を少し違った角度から見ることを鑑賞者に促しているようにも思われる。そこから得られる新しい視点は、現実社会と創造的に対峙するうえでの可能性を提示してくれるのではないだろうか。鑑賞者の思考を促すタイガー立石の作品は、先行きの不透明な現在だからこそ改めて説得力をもって迫ってくるように感じられた。(KK)



タイガー立石 「どらのゆめ」より原画 1984年 個人蔵

COLUMN

今を生きているからこそ、古典。

最近のステイホームの楽しみと言えば、歌舞伎や狂言といった伝統芸能の講演の配信を見ることだ。

伝統芸能の多くは、“型”^{かた}と呼ばれる古くから伝わる表現手法が駆使されているのだが、私が専門とする日本の書も同様に、“古典”と呼ばれる古くから伝わる優れた名筆に見える技術を駆使して書きあらわすことが重視されている。分野は違うが、両者に共通性があると感じている。

近年、伝統芸能や芸術家の中には古典的な表現に縛られていては発展性がないと、古典とは全く異なる表現手法を試みる動きが活発化しており、話題となることも多かった。一方で古典的な技術を武器に新たな作品を生み出す試みも確かに存在していたのだが、残念なことにあまりフォーカスされる機会がなかったように思う。

先日見た狂言の講演配信で、狂言師の野村萬斎氏は「現代人だからこそ、現代的な表現を求めていくことはもっともなことだが、やはり古典的な技術や表現には、戦争や疫病を乗り越えて受け継がれてきた力がある」と解説していた。現代劇だけでなく、伝統芸能の配信もじわじわ人気が出てきているところを見ると、古典作品が持つ普遍性に魅力を感じる人が増えているのではないかと感じた。

古典の“普遍性”は、偶発的に生み出されたものではない。古典的な文化や芸能に携わってきた人々が、常に「絶すまいぞ」という信念を持って日々の鍛錬を積み重ね、命をかけて継承してきた歴史に裏打ちされている。だからこそ古典には今を生きる私たちを支え、生きぬく力を与えてくれるのではないだろうか。

伝統芸能の役者に触発されてか、私自身もう一度古典を見直し、自分の書法技術のアップデートを図りたいと考えるようになった。表現することの楽しさや表現技術の奥深さを、改めて実感したからだ。コロナ禍の今、私は古典にもう一度、己を見つめ直すチャンスを与えられたと思っている。(☆)

編集後記

今号からリニューアルしてお届けいたします。これまでのコーナーを引き継ぎつつ、両面カラーでより手取りやすいサイズに、そして洗練されたデザインの紙面になりました！新年度になって新しいメンバーも加わり、気持ちをあらたにこれからも美術館の「今」を発信していきたいと思います。今後とも「名古屋市美術館ニュース アートペーパー」をよろしくお願い申し上げます。(KK)